

## 編集後記

大リーグが開幕した。今年も多くの日本人選手の活躍が期待されており、マスコミの報道も国内のプロ野球以上に加熱しそうだ。最近では野球にとどまらず、ゴルフ、テニス、フィギュアスケート等、日本の若者が世界でがんばっている姿を目にすることが多くなった。報道から察するに、彼ら彼女らの多くはジュニアのころからしっかりとした指導者につき、時間をかけて実力をつけてきたように思われる。組織的に個人の能力を見出し、育てあげ、また一流の指導者となって後輩の育成にあたるという好循環が働いているのだと思う。

一方、われわれ医学界ではどうであろうか。「医療崩壊」という言葉が広く使われだしたのはごく最近である。それでも臨床研修制度に端を発した医師不足は、救急、小児、産科、そして外科医をも巻き込む医療崩壊へと大きな負のスパイラルを生じてしまっている。華やかなスポーツ界とは全く逆の状況である。もっとも危惧されるのは、日々精一杯な環境による医師たちの臨床力さらには研究力の低下であり、わが国の将来を考えれば国策による対応が望まれる。

日本消化器外科学会雑誌の投稿論文を査読していると、しっかりと練られたすばらしい論文に出会う反面、以前よりも未熟な論文をみかけることが多くなったように思う。これも前述した臨床力低下を如実にあらわしているのかもしれない。とくに論文を書く上で基本となることが指導されていないケースが多い。すなわち希少性、新知見、症例数、診断的確性、治療的確性、術前検査内容、論文の記載法、研究デザインの科学性、結果の解析法、医療訴訟などの法的事項、倫理性などを十分に考慮してはじめて、目的にかなう論文に仕上がるのである。

論文を書くという作業は医師自身のみならず医学の進歩にとってとても大切なことである。それは1症例報告でも同じである。例えば、今日の消化器癌における molecular oncology の先駆けは米国の外科医による1986年の1本の論文である。精神遅滞をもつ42歳の大腸癌患者において5番の染色体に欠損があることをはじめて報告したこの論文を皮切りに大腸癌における遺伝子探索が飛躍的に進んだ。その結果 carcinogenesis の解明から、現在の化学療法を中心とした生存率の向上へつながったことは人類として非常に誇らしいことである。

医療の本質は for the patient であり、そのためには正しい教育、努力が不可欠である。本誌がその役目の一つを担うことでわが国の外科医全体の質向上に貢献できれば幸いである。